

男女共同参画推進連携会議「次世代への働きかけ」チーム第3回会合議事概要

1. 日 時 : 平成31年4月17日(水) 10:30~12:00
2. 場 所 : 中央合同庁舎8号館1階講堂
3. 議 事 : (1) ちゃぶ台返し女子アクションとのトークセッション
(一般社団法人ちゃぶ台返し女子アクション 中村 果南子氏
同 今村 さくら氏
同 春藤 優 氏)
(徳倉 康之 コーディネーター)
(大崎 麻子 副コーディネーター)
(2) グループディスカッション「各議員が次世代への働きかけについてどのよ
うに活動するか」
4. 出席者 :
(有識者議員)
飯田議員、石井議員、犬塚議員、大石議員、大崎議員、徳倉議員、村山議員、林議員、室伏議
員、山屋議員

(団体推薦議員)
田丸議員、花岡議員、降旗議員、潮議員、木下議員、富澤議員、植村議員、東福寺議員、
岩田議員、赤池議員、海野議員、飯田議員、小倉議員、西立野議員、梶原議員、名取議員、佐
藤議員、太田議員、山本議員、清塚議員

(発表者)
一般社団法人ちゃぶ台返し女子アクション
中村 果南子氏、今村 さくら氏、春藤 優氏、中村 茜氏、中根 未菜美氏、
ミーシャ・アリエル・ケード氏、横井 桃子氏

(事務局)
池永内閣府男女共同参画局長、栗田内閣府男女共同参画局総務課長、吉田内閣府男女共同参画
局総務課企画官、上西内閣府男女共同参画局政策企画調査官

5. 議事概要

○議事1について、一般社団ちゃぶ台返し女子アクション 中村果南子氏、今村さくら氏、春藤優氏より一般社団法人ちゃぶ台返し女子アクションにおけるこれまでの取組内容について発表が行われた後、当該発表を踏まえ徳倉コーディネーター及び大崎副コーディネーターとトークセッションを行った。主なやり取りは以下のとおり。

- ・ジェンダーや性暴力の問題を若い世代はどのようにとらえているか。
⇒若い世代の中でも、中高生と大学1，2年生と大学3，4年生では感覚や反応が違い、ひとくりにできない。大学3年以上は、多くの学生がジェンダー、セクシャリティに関して何かしら嫌な思いをしたことがあり、性暴力の問題が実感を持って受け止められている。
また、LGBTQ+に関心が高い学生が多くいる一方で、性暴力については自分とはあまり関わりがないと感じている人が多い。
大学の一学部で行った新生用ワークショップは当初参加必須の予定だったが、担当の職員が任意であると伝えたため、参加者が半数ほどになってしまった。ここから自分には関係ないという意識があることがうかがえる。身近な問題だと受け止めてもらうためには、日常生活の中でジェンダーやセクシャリティに触れていく必要がある。
- ・若い世代に、ジェンダーやセクシャリティに関する固定概念があったとしたら、ちゃぶ台返し女子アクションの活動を通じて、それにどのような変化が起きたか。
⇒ワークショップや啓発用ハンドブックの配布だけで社会を変えようとは思っていない。しかし、性的同意という概念を知った時点で、性的同意とは何か考え、自分の行為を顧みるためのアンテナが立つようになるという変化は起こっている。自分たちの活動はそのための種まきだと考えていて、それが急激な変化を求めるのではなく、制度の整備や性的同意を文化として根付かせるというビジョンにつながっている。
- ・中高生と大学1，2年生と3，4年生で捉え方が違うということは、就職活動や働くというステージに移るときにネガティブなイメージになるということか。
⇒就職活動も、もちろん大きい要因の一つではある。ジェンダーについて勉強することで、自分がされたことが暴力であったと認識できるようになるという面もあるのではないか。
- ・ちゃぶ台女子アクションに男性はいるのか。彼らが活動に加わった動機は。
⇒活動に参加する男性には、自分も加害行為をしているのではないかと心配する意識がある。
大学の活動に参加している男性の中には、自分も加害者であるかもしれないという意識を持って参加している人もいる。今までかっこいい男の振る舞いとされてきた行為が、暴力的だと気づいたときに、これからどうしたら良いか、新しいモテを考えたいという男性もいた。
大学の活動に参加するある男性は、性的同意について「女性がイエスといったらイエスだと思っていた。しかし、性的同意の話聞いて、対等な関係でなければイエスと言っていないとノ

一であると気づいた」と言っていた。また、男性が被害者である事例をみて、男性の被害は想定していなかったという意見もあった。女性だけでなく、男女の問題であり、誰もが当事者意識を持ち得ると思う。

・今後の活動の展望や、民間団体や行政機関に対する期待することは。

⇒学校教育の早い段階で性暴力について教え始めてほしい。その際に、従来の「女性が被害に遭わないため」ではなく、加害しないようにするにはどうしたら良いかについて伝えてほしい。

また、大人が性的同意について理解していないので、皆で性的同意について深く議論をしてほしい。

定期的に若い声を吸い上げて政策に反映し、それが可視化されるような場を作ってもらえれば、活動する若者たちの励みになる。

・所属する教育機関からどのようなサポートがあれば良いか。

⇒性被害が深刻だから啓発したいと大学の窓口と言うと、「本当にそんなにたくさんの大学生が被害にあっているのか。数ほどのくらいなのか」という話になる。言いたいことはわかるが、性暴力は可視化されにくい、被害者が声を上げにくいということに理解がない。話し合いの場を持とうとしても、性に関することを取り上げることがある種の禁忌になっていて、書面を渡すのみで終わってしまうこともある。本当に困っているということを機関内で共有してほしい。

・大学の窓口とは。

⇒学生生活に関して困ったことの相談を受ける部署、わたしたちの場合は学生生活課である。そのジェンダーに対する意識が低いとまったく受け付けてもらえないこともあるし、一つの課に話をしただけでは組織全体を変えられない場合もあるため、個別の教員にアプローチすることもある。

・組織の意思決定をする立場にある人たちのジェンダー規範や性暴力に対する理解が希薄であるところで、障壁は何かと聞こうと思ったが、ここまでのお話で大人が最大の障壁であると伝わってくる。個別の教職員が対応してくれたとしても、それが大学全体の制度となっているのが大きい。SDGsを掲げている大学は多いが、SDGsの一番のベースは個人の人権であることに理解が必要。SDGsの啓発の中でもこの問題をとらえて位置付けていくことが大切であると思った。

○議事1を踏まえてグループディスカッションを行い、「若い世代への啓発は、若い世代から行った方が心に響きやすい」「大学生皆がインパクトを与えることができるはずなのに、そう思っていない学生は多い。エンパワーメントが大事」などの意見があった。

○最後に、池永内閣府男女共同参画局長より、挨拶があった。

以上